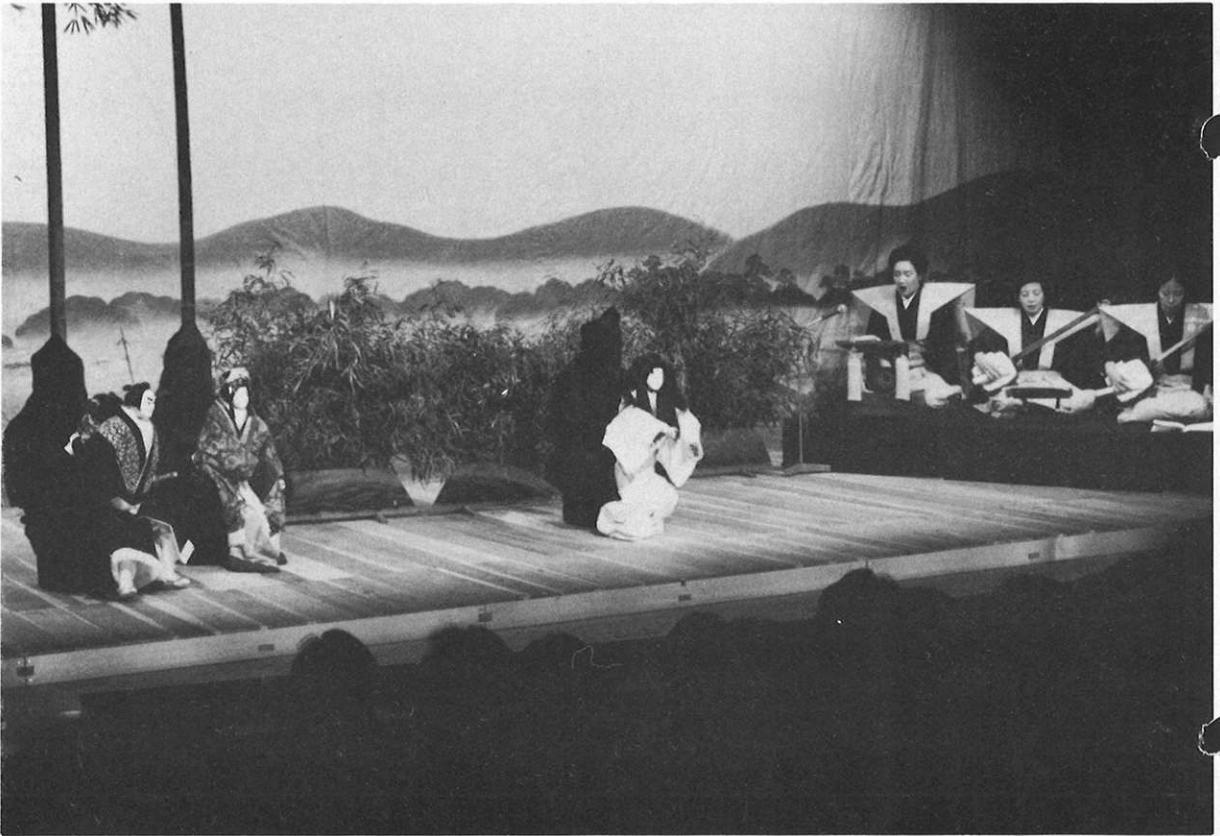


郷土はんのみ



八王子車人形・葛の葉 信田の森の段

撮影：西村一男

八王子車人形

島田 欽一

夫と呼び子としていつくしみしきえ詮なきことと肩をふるわす(信田の森二首)

恩愛のしがらみ強いて断ち切るとはつたと睨む異形の面

凶事謀害の待つと知らずやともし火をかきたててする雪の夜語り (雪女二首)

言うまじきことに触れたる口惜しさかな

べては消えぬ家の外とは吹雪

幻想の果てなる劇の幕は下り醒めたるごとき息を吐きたり

武州一揆の主謀者はだれ

新井清寿

慶応二年におきた武州一揆については、日本の歴史を大きく転換させた事件として、各方面から研究されているが、その主謀者についてはまだ定説がない。

秩父市で見つかった「一揆騒動増見聞の覚」によると、武州秩父郡上名栗村正覚寺下名栗村川又龍泉寺右二人の住持惣発徒にて一揆蜂起いたし、名栗村上下すべて百八十人余り徒党を結び、大幡に南無阿弥陀仏と印し、一本は平恒世直し將軍と太筆に印し、二流の幡を直先に押立て云々とあり、この事件の主謀者は二人の僧であるとしている。

また一説には名栗村の紋次郎と豊次郎であるとも言われている。これら主謀者説に対し山中清孝氏は「近世武州名栗村の構造」の中で「宗門人別帳によれば、正覚寺の住職大慶はその後もかわりなく記されており、嘉永頃龍泉寺の住職となった竜洞悟雲大和尚が入寂したのは、明治十七年（一八八四）である」としさらに「上名栗村の寺院は

すべて曹洞宗であり彼等住職が南無阿弥陀仏の旗をかかげることは少々あやしい」と述べている。

また日高町台の新井家の打毀し風聞日記によると「それより村続き真能寺村太物渡世喜兵衛方にて木綿反物等出させ、各々たすき鉢巻其外幡印様のものなど仕度いたし云々」とあり、飯能市直竹の清水家の「武州百姓乱打口之書」によると、六月十三日之夜村々往來家々門戸をたたき立、飯能町打毀すと大音に時の声をあげ掛け、夜中故に是非なく引連れられ、様子うかがい候所、頭取とも相見え候者は、数百人余白布之後鉢巻いたし、白綿たすきをかけ、白旗に梘と箸の印を押立て」とある。

これらの資料から、名栗の二人の僧が主謀者であったというのは少々あやしくなる。それでは誰が主謀者であったのだろうか。一揆終了後の七月に、名栗村役人から提出された報告書に紋次郎、豊次郎の申し口が次のよ

うに記されている。

「当五月十五日紋次郎儀飯能市場へ用事之有罷り出候ところ、飯能川原と申す所にて、成木村字悪惣と申す者に出合い、右悪惣申し聞かせ候は、米穀高値に付名栗道難渋致すべき旨、我等共へ申合せ、値下げに近々飯能川原に罷り出づべく旨申し聞かせ候に付、困窮の余り其の儀と存じ、帰宅の上豊治郎に申し聞かせ、当六月十三日朝、右悪惣より使いの者の由にて、面体知れざる者三、四人罷越し、当十三日夜飯能川原に詰め合せべく、出合ざる者は後日仇をなさるべき旨断り置き立去り候につき、兩人の者より右の段高声に申触候趣申候」とある。

これによると成木村の悪惣なる者が、飯能川原で紋次郎に働きかけ、紋次郎が同意して、豊次

郎によびかけたこととなる。それでは成木村の悪惣とはどんな人物であったのだろうか、故井上紋次郎氏は次のように述べている。

「成木村軍茶利の組頭で鈴木惣五郎という人がいた。彼は早くから小曾木村や成木村の産物である石灰を江戸で商い、馬で江戸と成木を往復していた。彼は別名喜左衛門といい、博徒であり「石灰惣」とも呼ばれていて、何かもめ事がある町は、彼の口ききでピタリとおさまったと言われている」

このように見てくると、悪惣は石灰商売の石灰惣であり、江戸の情況に最もくわしく、しかも組頭であれば、主謀者として最もふさわしいように思われる。その上博徒であれば仲間を使つてのオルグ活動も充分にできたと思われる。それが面体の知らない者で、この面体の知らない

者は吾野方面までオルグ活動をしている。

事件後府中宿にて取調べを受けた者の中に無宿者が多かった。取調べの後処罰された者は喜左衛門をはじめ、紋次郎、豊次郎等数人であった。

■飯能市史資料編

●今なら全巻揃えられる。

- 文化財編○飯能の自然―植物編○民俗編○社寺編○近世文書編○行政編(1)、(2)○飯能の自然―動物編○教育編○産業編……
- 各千円○飯能市史年表…五百円
- 中央公民館・図書館の窓口でも頒布しています。

新刊

■名栗川少年記 今西祐行著 偕成社刊 千二百円

江戸時代末期、困窮の中に起ち上った世直し一揆、二年後の飯能戦争、世の中の急変をいかに少年弥吉の目を通して描く。この地方の歴史を正確にとり扱った本格的な大河小説。

■高麗王物語 柳内賢治著 文化新聞社刊 千二百円

千二百年前、この地方に移り住み、高麗の文化を携えてきた若光とその一族の長い苦難の一生を、温い筆致で描く壮大なロマン。



富沢実先生追慕

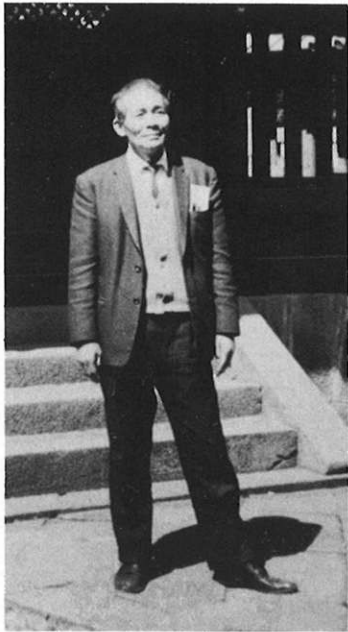
小谷野寛

私は飯能第一小学校に勤めていた頃の数年を富沢先生のお世話になったので、その頃の記憶をたどりながら、先生の片鱗を記してみよう。

素朴でふんわりした方——というのが初期の印象だったが、だんだんと、なかなか頭の切れる独創力に富んだ方——という風に変った。

先生が五年生担任の時、私も同学年の女兒級を持ったので、ひとりりで親しさも増していった。

その秋、富沢学級の自由遠足「わらじ会」に誘われた。これは名の通り、わらじをはいての遠足で、もう何回もやった様子



だった。私は生まれてはじめてわらじなるものをはいたが快適などにはほど遠いものだった。

目差すは高山不動と、その裏の堂平展望台。いよいよ登りつめるところの雑木林が見事な紅葉をしていたことは今も目にあ

るが、行動についての特に強い記憶はない。
ないといっても先生の、独自の引率方法、生徒の掌握の仕方、人間味のある、温かい指導——これをつぶさに見せられた思いだった。

同僚は先生を「富沢塾長」と陰で呼んだ。この語源は特に聞きもしなかったが、新参ものでもナルホドと分かる雰囲気をも

った言葉だった。何か塾長的なものが身辺に漂っていた。

この塾から、後の県議石井泰彦さんも生まれたが、彼は当時から同級生を掌握して、いわゆるガキ大将となって山野を駆け回っていた。「双葉より芳し」のたぐいであろう。

若くして理学博士になった藤原さんもこのクラス。先生の後後までもご自慢であった。然し先生は、出来のいい子や、有力者の子を可愛がるというふうな事は、さら／＼無かった。いや、鼻つたらしや知恵おくれの子などよく相撲をとっていたことを思い出す。こんなところが先生の真骨頂と言えるであろう。

さて、富沢先生が辿った教員道の道だが、聞いた話をつないでみると次のようになる。

吾野小学をおえるとすぐ頼まれて母校の代用教員となった。その期間に検定で初級の資格をとった。そして飛出したのが北海道、さらにサハリン、当時のカラフト。どんな手づるがあったものか、随分大胆な事をした

ものである。カラフトへは校長として迎えられた。村民や児童が並んだ前へ黒詰襟服に信玄袋をかついで颯爽と乗込んだという。

カラフトに何年ぐらい居たものか、病気で内地へ引揚げたのか、引揚げてから発病したのか、ともかく東京の片隅に病軀を横たえていた。医者は首をひねる一方、そこで「どうせ死ぬなら今生の思い出に関西を——と回りしよう」と、貯金を全部持って京都奈良と足の向くま、に見て歩いた。東京へ戻って間もなく例の関東大震災に逢い、命からがら逃出し、転々と居を移したが、死ぬはずの体が、一向に死なない。それどころかどうやら力がついて来た。地震が病気を振るい落としてくれた如くであった。

この後、故郷に戻って教壇に立ち、幾年か後、飯能第一小学校へと変った。昭和の初期らしい。

この第一小学校がある記念事業として飯能郷土史を作ることになった。というのは当時郷土教育が叫ばれていて、どの学校も郷土調査に取組んだ。先生ももともと好きな道とて、盛んに仕事を進めていた。これを見たのが小林校長だった。これに町

でも力を貸すことになって、その本作りの総指揮者となったのが勿論富沢先生であった。校内で補助したものが十人余り。

さて、物を調べて書くという仕事は大変辛気くさいもの。

基礎的な力の上に粘り強さが無いとだめ。本を揃えておいて読んで書く、というわけにはいかない。人を訪ねて物を聞き、大切な物を見せていただくことになる。それには人間関係が生じないとうまくいかない。先ず一つ話。更には一本提げてということになる。この段階は皆自バラである。

先生が後年、質屋通いの話をしたが、それは決して作り事ではなからう。当時先生の家には不幸ばかり続いた。どうしてこの家にはばかり——と思う程だった。

そんな中でも仕事はのびせなかった。ペンも折れよと書きまわった。この郷土史は絞ると血が出、呻き声が聞こえるといった体の労作だったのである。

六百ページの大冊は原稿用紙にして千二百枚。二度書直せば四千枚へ字を刻んだ事になる。正に男一代の大仕事であった。今尚この道の人の貴重な文献となっているが、完成の陰の労苦を知る人は少ない。

(この第二版が先頃本人にあ
いさつ無しに出たことは、誠に
解せぬ話であった。)

さて先生は退職後、市の文化
財係となり、これまた情熱を傾

雷電宮と石塚の雷神

坂口和子

けたので、県の表彰となった。
飯能文化賞の第一号も当然の如
く先生に贈られた。
仕事を離れてから病床に親し
むこと十余年。進行中の市史編

纂に関心を寄せつ、「俺の書い
たものを乗越えてくれ」と、繰
返した。昨年五月、天寿八十七
歳にて逝去。春光輝くばかりの
日の葬儀であった。

祀られていた。鏡板は約三〇セ
ンチほどの大きさで、そこに像
高一八センチほどの鑄造の観音
像が貼りつけられているもの。
様式などから推測すると江戸中
期ごろのものではないかと井上
峰次さんは云われたが、これが
奉納されてからはご本尊かご神
体かになっていたのでないだ
ろうか。神仏混合の時代のこと
だから、ご本体は神であつても
仏であつても一向かまわなかつ
たのかも知れない。

けもっている。雷電という名は
あつても特に雷よけのものでは
ないことがわかる。
農山村に生きるものにとつて
は、季節ごとの嵐や雹や落雷な
どの被害から、農作物を守り、
また人や家畜が安全であること
が、共通のそして切実な願いで
あつたらう。その共通祈願所と
して雷電宮は、他の多くの神々
と同様に、作神的性格をもつて
信仰されてきたものと思われ
る。毎年十月九日が祭礼で、組内の
人が集まり、神官を招いて祈願
をするという。嘉永年製の大き
な祭礼の旗ものこされている。
またその当時は念仏講もあつた
よう、百万遍の大きな数珠や
女性名の刻まれた鉦も見せて
いただいた。

以前から雷電神社とか雷電宮
とかいう御社に、どんなご神体

が鎮座しているのか興味をもつ
ていたところ、たまたま川寺の
井上森三さんという方から、石
像の雷神があるという耳よりの
話をうかがつた。ご実家の井上
西組井上清三郎さん宅地内にあ
る雷電神社が老朽化し、その修
理のためしばらくご神体を他の
場所に移してあるので、今なら
拝見することができるといふこ
とだつた。

そこで早速、井上東組におら
れる井上峰次さんにご同行いた
だいて、井上清三郎さん宅に伺
つた。裏山の石の階段をのぼる
と、小さいながらしっかり彫刻
もほどこされている雷電神社の
社殿があつた。なかのものは全
部とり出されて、隣の西組自治
会館に安置されていた。

胸躍らせて対面したのが写真

の雷神さま。

像容のある石造雷神は全国的
にも教が少ないといふことなの
で、この辺では珍らしい。タテ、
ヨコ二〇センチほどの小さな石
像だが、彫りが精巧で、堂内に
祀られていたせいか、天保十四
年(一八四三)造立とは思えな
いほど新しくみえる。おとし
嘶にでてる雷さまのバターン
で、五つのタイコを背に、筋肉
隆々の体軀。両手にはバチをも
ち、雲をふみつけて忿怒の形相
猛々しい雷神だが、どこかとほ
けた愛らしさがみる人の心を和
ませてしまふ。

この雷神像の奉納者は、遠州
灰原郡高熊村の梅蔵さん。この
東吾野村に(現在は飯能市井上
西組)その昔縁あつて移り住ん
できた人だそう。雷電神社な
ので、イメージ通り雷神さまを
奉納したのだから。石も石工



もこの辺のものではなさそう。だ。
この場所には昔、雷電山地蔵
院という新義真言宗のお寺があ
つた。雷電山という山号があつ
たので、境内に雷電神社の御社
を建立したのか、古くから雷電
神社があつたのでその別当とし
て地蔵院ができたのかはわから
ない。しかし当初の雷電神社の
ご神体は何だったのかと気にな
る。

実はこの雷神さまのほかに、
御社内には、鉄製の懸仏が一つ
奉新造立雷電宮一宇風雨順時
諸願成就皆令満足之所」とあり、
宝暦十年(一七六〇)のものは、
「奉新造立雷電宮一宇風雨順時
村中安全諸願成就祈所」となつ
ている。これで見ると、当時は
雷電宮と呼ばれていたよう、
風雨順時、諸願成就の祈願をう

帰りがわ、もう一度雷神さま
をよく見ると、光線の加減か、
鬼が泣きべそをかいているよう
にみえた。ひよつとすると、奉
納者の梅蔵さんは大の雷嫌いで、
それでわざわざ雷神さまを彫ら
せたのかも知れない。

新刊

■隨筆集

「千手幻影」坂口和子著

(埼玉文芸賞受賞)

言叢社刊：千五百円

原市場の地名と屋号あれこれ

浅見 茂

昭和五十三年原市場郷土史研究会が発足、第一回の研究課題が「地名と屋号」であった。今回、会員それぞれが努力の結晶を、本にしようということになり、その編集にあたった者として、その間あれこれを書き綴ることにした。

ご承知のように、原市場地区は、入間川と中藤川を中心にして、まわりをすべて山で囲まれた村落の關係で、山間部特有の地形から名付けられた地名が非常に多い。山間地で、平地の少い關係から、稀少価値の窪地や平地があると、山を含んでいて、〇〇窪（久保）と名付けている。平地へのおこがれから名付けたものである。

入間川も中藤川もそれぞれ多くの支流を持っている。川の流れる所は谷である。谷に名がつくと、滝ノ入、棚沢、釜ノ入となる。入（いり）は谷の奥、山寄りの意で、小さな谷に使われている。沢は谷川で、雨が降ると水の流れる森林のある窪地、ざわ／＼と音をたてる水音から

きているという。入があれば、そこには必ず水が流れるので、沢の名も生れてくる。ただ、名付けるときに、どちらを主と見るかにより、東沢、北ノ入といったものである。また、滝ノ入、滝ノ沢と、滝を頭に持つ地名は、いずれも岩場で、雨が降ると滝となつて水の流れ落ちる所で、釜の入もこれに類する。釜（かま）とは、滝壺の意で、前者同様に岩場である。

その他、植物名のついた地名に、松・竹・梅・桜等々二十種類三十五か所もある。ところが、梅の木、桜の木が沢山生えているというのではなく、梅は埋、桜は狭間（はざま）というようにとんだ不粋な意味から名付けられた地名が多い。

原市場は、埼玉県地名辞典、（葦塚一三郎著）によると「原市場名は、この地に市場があつたことからおきている。それならばいつ頃に市場が開かれたかと言うことになるのであるが、原市場の名がすでに中古にみえているところを以つてすると、

鎌倉時代に市が立っていたとみてよいと思う。以下略」とある。会員の中に、次のような俗説があると言う者がいた。話は遠く平将門にさかのぼる。将門が戦いに破れた時愛妾が逃れ来たり、西多摩方面に行く途中、持参した品々を市を立て売りさばいたことから原市場の名が生じた。

大宇唐竹の中に、よまき（地元の人にはよまぎと呼ぶ）の地名と屋号がある。担当の本橋幹治先生が、大日本国語辞典には、よまきは二布（ふたの）で腰巻に用いるとあるが、はつきりしないとのことであつたので、裏付けは無いかと調べてみた。地形は、山裾をとりまいた小平地である。一方県内に、腰巻の地名を二か所発見できた。内一か所は市内下加治にあり、鹿山尾根の山裾にそつて開けた地形の土地で、唐竹のよまぎに類似する。以上のようなわけで、よまき＝腰巻＝山裾の意で、裏付けが出来たと思つた。しかし、よまきは「よもぎ」の転化だと、一歩も引かぬ会員もいる。

私の住む大宇赤沢字茶内の地名の起源は、前々からアイヌ語から由来すると言われて来た。地名研究で種々の参考書をあさるうち、アイヌ語地名の南限は、福島県と言う説が定説になつていることに気付いたので、アイヌ語以外で考えて見た。「ちや」は茅屋でちがやの屋根。「ない」は小平地。合わせてちがやで屋根をふく程沢山生えている土地と言ふことになる。またちがやが短かくなつて「ちや」茶となつたとも考えられる。ほかに、茶は焼土の色で、茶内とは焼けた土の色をした土地の意との説もある。ところが最後になつて、北海道の根室線に茶内駅のあるのを発見、アイヌ語で沢にそつた日当りの好い土地と言ふ意味だと、当地にも合致する。

以上のように地名を調べ考え、見方、考え方によつて種類の理由づけがなされ、我々素人ではとうてい一つに断定できないことを深く感じた次第である。

屋号の調査も地名と並行して行った。近年開発が進み、建売住宅もふえて屋号もできなくなつて、時代も屋号を必要としなくなつて、次第に忘れ去られようとして、現存しているので、何とか記録に残したいとの会員の願望で調査した。屋号を調査してみると、旧幕時代の屋号と、明治以後の屋号との相違がはっきりと区別できる。地名を屋号とする家は、その土地に一番早く住みついた旧家と思えばよい。新屋、新宅などは皆明治以降の屋号である。中世武家屋敷に由来すると思われる屋敷、内出等の屋号も各地に散在する。旧職業のかじや、紙屋等も今なお生き残る屋号である。

最後に、地名も屋号も我々に最も身近なもの、大切にしていきたいと思う。

新刊

■写真集

「明治大正・昭和・飯能」

赤田喜美男編

国書刊行会刊：四千八百円

■写真集

「奥武蔵・四季」

藤野 淳著

奥武蔵出版会刊：千四百円

■研究レポート

「甕れ入間川」

谷沢保平著

環境と自治研究会刊：

千五百円

「飯能郷土史かるた」 うらばなし

赤田喜美男

「飯能にも、子どもが気軽に遊べるかるたがほしいね。できれば郷土の歴史や文化財も覚えられる……」誰からともなくそんな声が出たのが五年ぐら以前、それでは郷土史研究会で作ろうということになって、早速読み句の募集を会員に呼びかけたのだが、準備不足もあってか応募点数が少く、時を待とうということそのまま二年程過ぎてしまった。

その間に、近隣でも「川越文化財かるた」「坂戸文化かるた」「さいたまかるた」など、それぞれ特色をもって発行され、静かなブームの様相を呈してきた。そろそろ機が熟した頃と役員会で話が復活したのが昭和五十八年五月のことであった。再募集するについては、対象を会員外にもひろげることにして各新聞にもとり上げてもらった。

それからが忙しくなった。審査、考証、作画、説明文、印刷配布、その前に予約募集をしなくてはならず、それもすべてを何としても年内に完了しなければならぬ。もちろん専任は一人もいない。全部片手間にやらなければならぬ。それに、コストを下げるためには、なるべくたくさん予約をとってたくさん刷らなければならぬ。まず審査は、会員のうち、俳句、短歌などに造詣の深い十人の方にお願した。かるたの審査は、普通の文学作品や作文などの場合と一味異った諸点もっている。

●五七五調の句が優れていて座りがよいこと。
●主要な文化財や各時代の事象が盛りこまれていること。
●市内各地区の事物をバランスよくとり上げるよう配慮すること。
●同じ事柄をダブらせないこと。
●いろは四十四文字（をみえんを除いた）に無理なくあてはめることなど。

審査会は熱気をこめて数回開かれた。優れた句があっても、ダブっている場合は惜しみながら一方を捨てざるを得なかったし、調子よくできていても、歴史的事実と違う場合は朱筆が加えられた。こんな例がある。「平安のいらかゆかしい福徳寺」という原句については、福徳寺は、平安の様式を模してはいる



いう句ができた。また、かるたを作る場合どこでも苦勞するという「ラ行」の句も、「ラッパ吹き」「竜漕山」「累代の」「霊亀二年」「六道を」で無事に乗りきることができた。こうして原作に対して審査会の訂正補作は約半数の句に及んだ。説明文は、新井会長が考証を重ねながら、しかも小学生にも解るような文章で数日のうちに書き上げてくれた。かるたの半分を受持つ絵札の画は、会員の三枝画伯にお願いすることにしたが、氏は百科事典などの挿画などを永年手がけたベテランだけに、一枚一枚を旦念に、不明な点は現地へ行つて調べてくれた。紙漉きの画は小川町へ出かけてスケッチしてくれ、テト馬車の画を描く時には、何人もの古老を訪れて馬車の部分を詳しく調べられた。そして四十四枚の原画のために、ほとんど二か月のすべてを費されたという。こうして読み句、説明文、イラスト、とり札の原画が揃ったところで文化新聞印刷部に渡されたのだが、時間の制約もあり、かるた制作がはじめての経験のため、印刷所でもずい分苦勞したようだ。しかし予定どおり刷り上げ、箱に入れてくれた。さて、これら制作と並行して販売の仕事があった。もちろん営利のための仕事ではないが、何とか会の費用のもち出しは防ぎたい。ということで発行部数を決めることになったが、全部予約制として初めは常識的に千部、教育委員会の推せんが得られたので強気に二千部と決まっていたが、十一月のなかばになって、飯能地区の自治会が予約募集に協力してくれる事になったので、一気に三千部に決定することができた。そして事務局の中央公民館と図書館を窓口とし、各団体の協力を得て歳末までに三千部をほぼ販売することができ、各地の図書館などに寄贈することもできた。まさに半年の馳け足作業だった。

この間、市内の各新聞社の誠意に好意ある扱いには改めて感謝せずにはいられない。年が改まって、子どもたちもかるたとりが集まってくれたし、婦人会も読書会もかるた会を開催してくれた。そして他の市町村からもたくさんの方の問い合わせをいただいた。

大勢の人々の協力と、いくつかの幸運によって生み出された

かるたであつてみれば、これからもなるべく大勢の子どもたち

に覚えられ、遊びに使われてほしいと願わずにはいられない。

振武軍の詩

内野久喜

飯能戦争の歴史について駄作ながら次の詩を作ってみた。

敵弾擦衣排難艱
利剣攻防一刻間
如善戦何吾陣危
春風決死羅漢山

歴史に忠実である事が望ましいが、振武軍の気持ちになつてこんな事もあり得ると思ひ作詩した。官軍に対し闘う事が勇壮の気あふるるものとしてよいと思う。

第一句の「敵弾衣を擦り難艱を排す」は遠くから弾丸の飛び

来る中を切込んでゆく様を表現してみた。市街戦の場合、相互に敵影を発見した時は発砲出来るものなら先ず発砲するだろう。不意の場合は切込みも出来る。切込突進中弾丸に当たる事もあり、又これはまずいと思ひ逃げる。そこで発砲される事もあるだろう。事態はまちまちだ、逃げながら撃たれ死んだ人もあるだろうが、死線すれすれの場面を想像してこれを一句とした。

第二句の「利剣の攻防一刻の間」は大規模の戦闘はなかったようだが各所の戦闘は避けられ

なかったであろう。

第三句の「善戦をいかんせん吾が陣危し」及び四句の「春風死を決す羅漢の山」はし烈な攻撃を受け、官軍の圧倒的優勢、ついに本陣に火の手まであがつた。もう駄目だと直感し決死の逃亡を覚悟したであろうか、それとも最後まで決死の戦を挑もうとしたであろうか、羅漢山で決戦をしていたなら、数多の戦死者も出たであろうし、歴史の色彩も異つたであろう。渋沢平九郎は逃げる途中で敵に発見され、自刃した。羅漢山で自刃したなら、詩も迫力があり、懐古の情豊かなるものが出来たかも知れない。

加治だより

原市場だより

五八年度の会の行事は七回。

第一二回郷土資料展は「私たちの生活と竹」を主テーマに三日間加治公民館で開催、展示と実演は好評で参観者約五〇〇名を数え、概ね目的を達した。

毛呂、越生と原市場谷津の見学会は地元郷土史会の案内をいただき、内容豊かな行事ができた。そのほか足利の文化財、きたま風土記の丘見学会、加治川北地区歴史散歩、平松、岩沢池の東遺跡の発掘協力と同遺跡の見学等を行った。

去年度の会は予期しないことが多い年だった。嬉しかったことは秋の市民文化の集いで「飯能文化賞」の榮譽に輝いたこと受賞祝賀会を催し、今後とも期待にそうよう努力することを誓い合った。

悲しい出来事、それは加藤一先生（初代会長）志茂道一副会長、小俣彰男顧問が逝去されたことだった。会の大きな損失で誠に残念。ご指導を感謝し、ご功績を偲んで、心からご冥福をお祈り申し上げる。

(西野)

前号以後の動きをかいつまんでご紹介する。

(一) 念願の会誌「原市場の地名と屋号」も一昨年末原稿が完成し、昨年春印刷業者に発注し、ようやく校正も終り、十一月末には出版することができた。

(二) 定例会は三か月に一回開催、現在の課題は昨年に引続き石仏の調査を実施中。

(三) 十一月二三日の文化祭には明治、大正、昭和初期の教科書を中心とした出版物の展示、郷土史かるたの予約受付を行った。

(四) 十一月二十一日から四日間、県立歴史資料館職員五名と、東沢の山頂、竜ヶ谷城址の調査に参加する。二月、市教育委員会の史跡発掘に協力。場所は赤沢三三〇番地の畑。

(五) 六月四日研修旅行。参加者二十四名、児玉町玉蓮院、埴記念館、金鑽神社、秩父まつり会館を見学する。

(浅見)





■写真上

六月十五日、中央公民館で総会と研究会が催された。講師は絵馬師の小槻正信氏。「飯能の絵馬あれこれ」と題した講話は、絵馬作りの修業時代の失敗談から、絵馬の図柄の変遷に及び、質疑応答も活発に行なわれた。

■写真左上

「郷土史かるためぐり」は、公民館と共催で、六月から十一月まで五回にわたって催された。コースは、天覧山周辺、南高麗地区、加治地区、中山・精明地区、川原・小岩井地区に分けて、かるたでとり上げた史跡などをめぐった。講師は会員が担当した。

■写真左中

十一月一日から行なわれた文化



祭は、文化財保護審議委員会と共催で、今年の郷土史展は「狭山茶」をとり上げた。会場の中

央公民館の第六学習室には、狭山茶の歴史、製法などのパネルに、茶業組合から提供された各種の製茶道具が陳列され、多数の観覧者があった。また説明書パンフはなか／＼好評であった。

■写真左下

郷土出版展は、茶の展覧会と併行して、「明治・大正・昭和の飯能市民の出版展」と銘うって開かれた。図書館のカードを調べ、出版目録を作った。その結果、九十人が二百十冊の本を出版していることがわかった。本は、図書館所蔵のものに加えて、会員の協力によりリストの約八割のものを陳列することができた。



郷土史研究会役員

- 会長 新井 清寿(川原町)
- 副会長 井上 峰次(井上)
- 監事 双木 利夫(八幡町)
- 小谷野寛一(新町)
- 山岸 雄司(前ヶ貫)
- 理事 新井幸一(本町) 内野久喜(下畑) 岡野達雄(本町)
- 織戸市郎(中山) 加藤義雄(柳町) 清原恒雄(北川)
- 倉掛一男(原市場) 坂口和子(小瀬戸) 島田欽一(双柳) 中村好男(仲町) 西野長治(岩沢) 小山誠三(川寺) 西村一男(下赤工)
- 野口正元(小瀬戸) 平沼恒夫(山手町) 横田稻吉(坂石町分) 赤田健一(図書館)
- 森田清次(教委) 浅見徳男(市史)

編集後記

○会報の発行がまた遅れてしまった。執筆された方々、会員の皆様にお詫び申し上げます。○今年度は、今までになくいろいろな行事が催された。

上の記事にも触れたが「郷土史かるた」の頒布、公民館と共催で催した「かるたためぐり」、秋の文化祭には、「お茶の展覧会」「飯能の出版物展」と目録の発行等々。ことに八王子車人形の公演では、加治郷土資料同好会の力添えがあつて成功裡に終了することができた。

○加藤前会長に次いで、富沢実先生が昨年五月に逝去された。先生は郷土史研究の草分けの存在であり、実務家としても多くの業績を遺された。御冥福をお祈り申し上げます。(A)



郷土はんのう 第五号

発行所 飯能郷土史研究会

飯能市仲町二八一

飯能市立図書館内

印刷所 コバヤシ印刷